



日本百名山 登山日記



歩みを止めなければ、いずれ頂に辿り着く、そんな山日記です

vol.16 雲取山（日本百名山 18/100）

山口県最高峰の名前を言える人、そしてその標高を知る人は何人くらいいるのでしょうか？

山口県最高峰は錦町宇佐にある寂地山であり、標高は1,337mとなります。

では、東京都最高峰とその標高は？

山に興味が無い人は想像も出来ないと思いますが、東京都の最高峰は雲取山で、その標高は2,000m越えの2,017mとなります。

大都会の東京に2,000mを越える山があるとはちょっと意外かもしれませんが、雲取山は標高2,000m～2,500mの山々が連なる奥秩父山地の東端に位置しています。

（尚、山頂は東京都、山梨県、埼玉県の都県境となります。）

一般的にはあまり認知度が高いと思えない雲取山ですが、しかしながらここ数年、あるアニメの影響でこの山が聖地巡礼の場所となっています。

ご存じの方もいらっしゃると思いますが、雲取山は「鬼滅の刃」の主人公である竈門 炭治郎と、妹の禰豆子の生まれ育った土地のモデルとなっているそうです。



登山口周辺には、炭治郎と禰豆子が着る羽織の柄（市松模様）の幟旗があります

さて、ここで大問題が！

感の良い人ならすぐにお気づきになったと思いますが、聖地巡礼と称して、登山の知識がない人が軽装で多く訪れることから遭難が多発、地元自治体が注意を呼び掛けているそうです。

主な遭難は滑落や転倒、道迷いなどで、私が調べた記事の中には、下山中に倒木をくぐろうとした際、ザックが木に引っかかってバランスを崩し約150メートル滑落という悲惨なものまでありました。

登山を趣味としている者から雲取山を見れば、距離はややあるものの、危険な箇所は少ないことから、地元の低山から2,000m級の山へとステップアップするには丁度良いような気がします。

ただ、そこは標高2,000m越えの山、正しい知識と体力・技術、そして適切な装備が無ければ、天候の急変なども含め、命を落とすことになりかねません。

先の丹沢山のコラムにも書きましたが、自然を舐めると危険な目にあう事を常に肝に銘じておく必要があると思います。

当日、登山していてびっくりしたのが、ザックを持たずにコンビニのレジ袋にジュースを2~3本入れて登っていた若者、スニーカーで登ろうとしている若い女性、また雪がわずかしか積もってない箇所

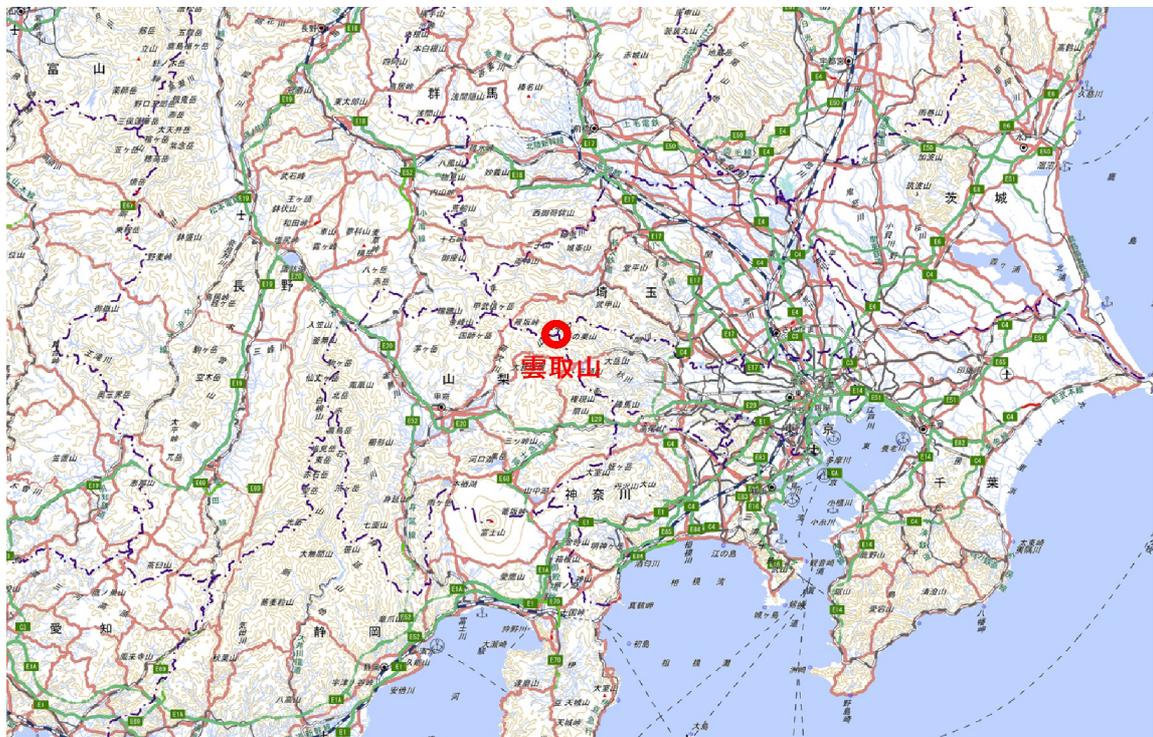
で前爪のあるアイゼン(12本爪)を履いて土や石の上を歩く中年男性、正直、理解できません。

アイゼンを岩などに引っ掛けて転倒しないかと、見ているこちらが冷や冷やです。ただ、ほとんどのみなさんはフル装備であり、またテント泊の人も多く山慣れたような方ばかりだったので、逆に貧弱な装備の方が目立っただけなのかもしれません。

さて、雲取山については、日本百名山の著者 深田久弥 氏は以下のように記しています。

「三多摩が東京都に編入されて以来、この大首都はその一隅に二千米の高峰を持つ名誉を獲得した。あえて名誉と言う。煤煙とコンクリートの壁とネオンサインのみがいたずらに増えていく東京に、原生林に覆われた雲取山を誇っていいだろう。忘れてはならないことは、東京都民の生活の根源をなす水道は、この山の東面の大森林を水源としている事である。雲取山は、大東京都一円を俯瞰している。逆に都からこの山を眺めることを知っている人は、あまり多くはあるまい。」

私個人の意見とすれば、いくら大都会 東京の片隅と言っても、多少なりとも山も都会の賑やかさがあると思っ

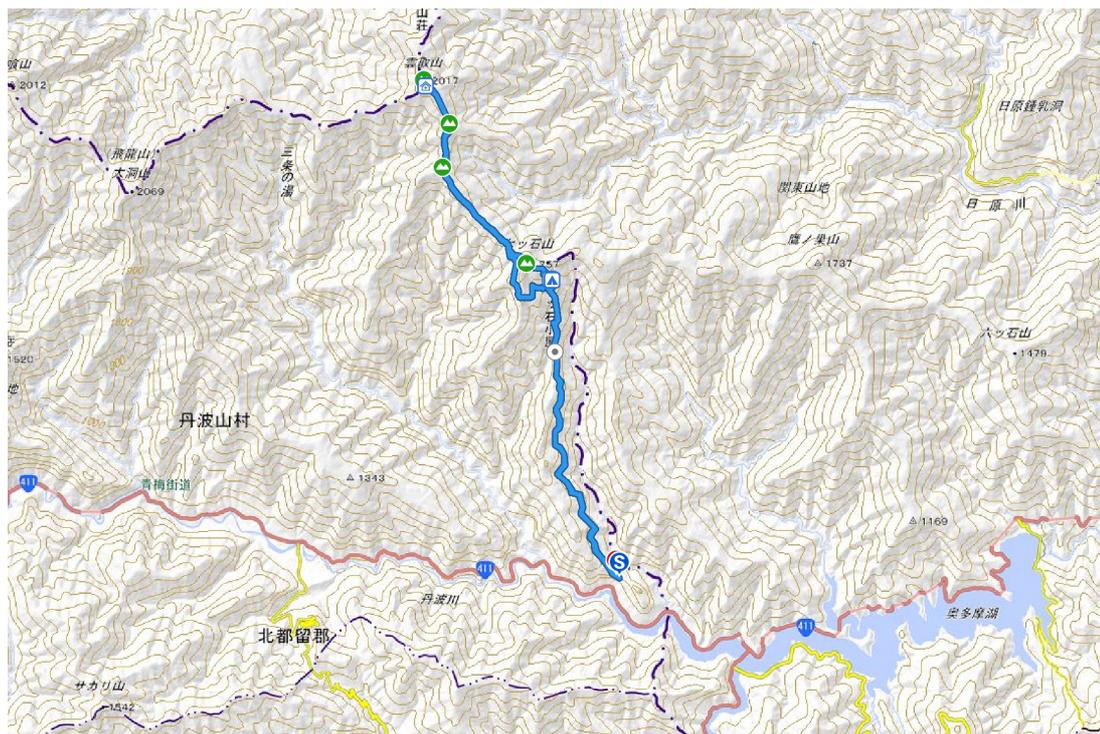


今回の雲取山への登山ですが、山口県からのアクセスを考え奥多摩湖側にある主要登山道の一つである鴨沢登山ルートを選択、山梨県北都留郡丹波山村の村営小袖乗越駐車場を起点としました。丹波山村は人口514人（2022年2月1日推計人口）、人口密度約5人/km²となっており、東京都心から100km程度しか離れていない地域にもかかわらずこの少なさは正直びっくりです。

登山口まで向かう道中、夕方、薄暗い時間帯だったにも関わらず家々の灯はほとんど付いておらず、廃屋が多い限界集落のような感じでした。

余談ですが、日本全体の人口密度は約335人/km²、東京23区は約15,400人/km²、山口県は約220人/km²、北海道は約69人/km²、ロシアの人口密度は約9人/km²、カナダは約4人/km²、オーストラリアは約3人/km²となっていますので、丹波山村の5人/km²が如何に過疎地であるかわかります。但し、大半が山地であり、人が住める平地がほぼ無い地形であることも付け加えておきます。

以下、登山データです。



登山データ：距離 19.9km 累積標高上り 1,707m 登山区分 日帰り (ヤママップのデータを転記)

では、今回の登山について報告します。

山口県を朝6時に出発し、山陽道→名新→新東名→御殿場JCT→東富士五湖道路→中央道 大月IC、そこからは国道139号を經由、大阪－京都間で渋滞に巻き込まれ、また途中休憩を挟みながらの運転で、登山口駐車場に到着したのは18時45分でした。

移動時間は約13時間、遠い、遠すぎます。しかも天候は雨、たまにみぞれ交じり。

当初は、飛行機や新幹線+レンタカーの利用も考えましたが、ちょっと微妙。

北関東以北なら間違いなく飛行機（格安航空で福岡－成田）が優位ですが、登山口で車中泊するならレンタカーは装備的に快適性が無いのでパス。また、市街地に近い登山口ならビジネスホテルの利用もありですが、これも翌日の早朝、登山口までの距離や時間を考慮すると無し。

登山装備+下山後の着替え、宿泊用の荷物を持って動くことを考えると公共交通はやはり厳しい。という訳で、マイカー移動を選択しました。

さて、当日は午前4時半に起床。相変わらず、登山口での車中泊はいつも熟睡、体調は万全です。しかも、車外に出てみると暗闇の中に山の稜線がくっきり！これは良い天気が期待できます。

但し、前日のみぞれ交じりの雨が気になるところで、山は多分雪だろうな～と思いながら、登山服に着替え、朝食を摂りながら明るくなるのを待ちます。

午前6時、周辺が目視できるくらいの明るさになると、私と同じように車中泊をしていた登山者たちが、続々とスタートしていきます。私もその流れに乗りスタートします。



目が覚めたら駐車場はほぼ満車でした



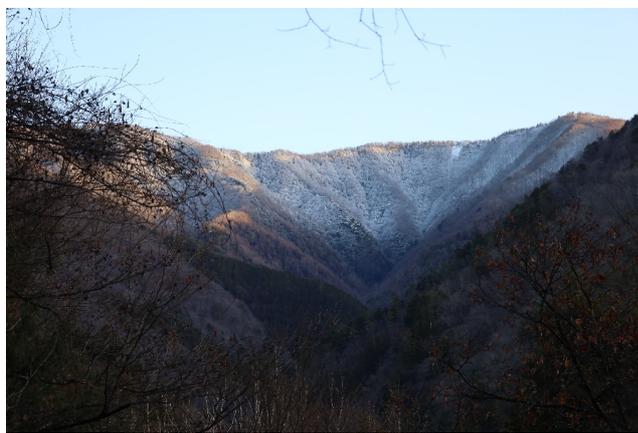
駐車場から少し歩くと登山口です

標準コースタイムは10時間20分（休憩時間含まず）、まずは約6km先の最初のピークである七ツ石山（標高1,757m）を目指します。

スタート地点からの標高差は約1,000m、勾配は緩やかでありウォーミングアップには丁度良い感じでした。樹林帯に入るとまだまだ薄暗い状況でしたが、特に問題なし。登山道は非常に整備されており、転倒などのリスクも非常に少ない状況です。



穏やかな登山道



稜線に霧氷が見えてテンションが上がります



鬼滅の刃の世界が広がります



奥多摩湖の上はガスで覆われています

樹林帯の登山道は緩やかで快調に歩けますが、風もなく予想以上に気温が高く暑すぎました。スタートして、30分も経たずにネックウォーマーを外し、ミッドレイヤー（薄手のフリース）を脱ぎます。

ここで悲しい出来事が…、なんとネックウォーマーを紛失してしまいました。

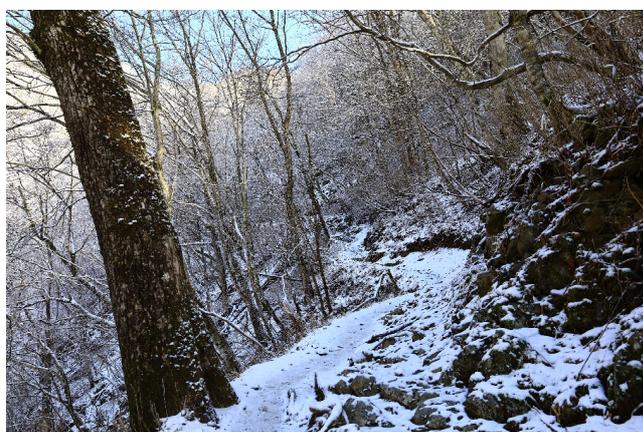
尚、気付いたのはそれから1時間ぐらい歩いた後です。

このネックウォーマーはメリノウール100%のお気に入りの品で、下山時にも探しましたが見つかりませんでした。

帰宅してすぐに、ネットで同じものを購入しようと探しましたが、その商品は売り切れ、使い心地、肌触りが最高に良いものだっただけに、本当にショックです。

さて、スタートから2時間弱で七ツ石小屋に到着しました。

常時、管理人がいるとの事でしたが、人の気配がありません。という事で、寄らずに通過します。



標高が上がると徐々に雪が出てきます



七ツ石小屋です

小屋から先は、そこそこの勾配の登山道を約15分登ると七ツ石山（標高 1,757m）に到着です。

天候にも恵まれ山頂からの風景は非常に素晴らしく、これから登る雲取山や富士山、そして南アルプスを見ることが出来ます。

冠雪した山々は青空に映えて非常に美しく、これを見るために登ってきたと言っても過言ではありません。



七ツ石山の山頂（他の登山者のポールあり）



木の真後ろが雲取山の山頂



南アルプスの山々 (右から甲斐駒ヶ岳、仙丈ヶ岳、白峰三座)

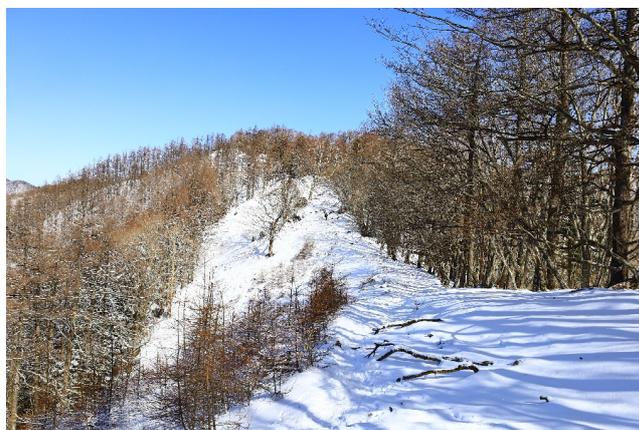


富士山 (七ツ石山の山頂から少し下ったところから)

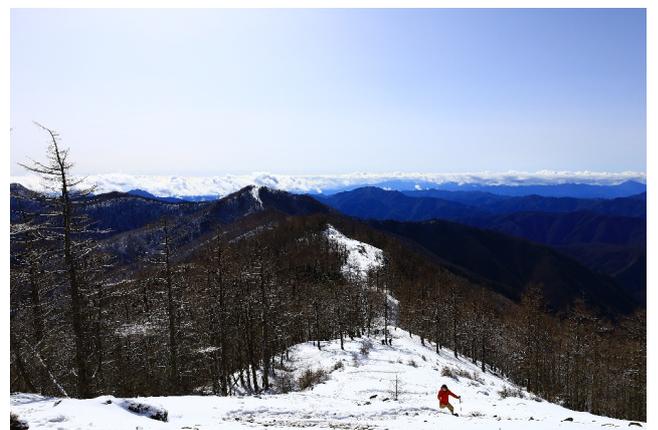
山頂で写真を撮った後は、次の目的地であるヨモギノ頭 (標高1,813m)を目指します。

実は、雲取山だけを目指すのであれば、この七ツ石山は登らずに巻き道で迂回する事も出来ます。下山時にこの巻き道を通ったのですが、非常に緩やかなルートであり、七ツ石山に登るような負担は皆無でした。

雪面に付く踏み跡を見るに、多くの方が体力温存の為に巻き道で雲取山を目指しているようでした。さて、七ツ石山から少し下ると、そこから先は稜線歩き、気持ち良いハイキングが楽しめます。この辺りから雪は増え、前日に小屋泊をされて下山している方や休憩されている方の足元を見ると8割以上の方がチェンスパイクを装着されていました。



気持ち良い稜線歩き



後のピークは七ツ石山

ただ、積雪深も浅く雪質も問題ないので、私は特に必要性を感じませんでした。

むしろ、足に負担がかかるので履かないで対応できるなら、それに越したことはありません。

テント泊装備で下山中のソコの若者とすれ違った時に登山道の状況を尋ねると、履かないでも特に問題ないとの答えでした。

ヨモギノ頭までは穏やかな稜線を歩き、最後に少し急こう配を登れば到着です。

ヨモギノ頭では特に休憩もせず、さっさと次に向かいます。

次はいよいよ、本日の目的地である雲取山山頂です。

その前に、たぶんこの行程の核心部である小雲取山への急登？がはじまります。

正直、距離も勾配も大したことはなかったのですが、登山者に圧雪された登山道は、上りはまだしも下りはチェンスパイクが必要だと感じました。

実際に下りでは、山頂からここまでの区間は滑落しないように安全を期して装着しました。



核心部の急登???



小雲取山から雲取山までの緩やかな稜線



積雪はわずかです



山頂の避難小屋が見えてきました

午前9時50分、雲取山の山頂に到着です。

山頂では、数名の登山者が食事をされたり写真を撮られたりしていました。

しかしながら、ここは本当の山頂ではないのです。

山頂と言えば山頂ですが、ここは山梨県側の山頂であり東京都の山頂はここから少し先になります。

事前に調べていたので事無きを得ましたが、知らなかったらと思うとゾッとします。

わざわざ遠路はるばる来て、山頂に到達できず下山したのでは悲しすぎます。

余談ですが、以前、大阪府の最高峰を目指した時、二百名山の金剛山に登りました。

実は大阪府の最高峰は大和葛城山なのですが、大阪府の最高地点は金剛山の中腹となり、またそこには紛らわしい事に葛城岳があります（金剛山の山頂は奈良県）。

まあ、単純な勘違いだったのですが、日本百名山以外に各都道府県最高峰の登頂も目指している事から、日をあらためて大阪まで登りに行きました。

さて、今回の登山に話を戻しますが、雲取山の最高地点（標高2,017m）は東京都にあります。

登山道はずっと山梨県内を通るのですが、山頂だけは都県境を数十メートル越える必要があります。

という事で、山梨県の山頂より数分もかからずに、東京都最高峰である雲取山山頂に到着しました。



山梨県の山頂標



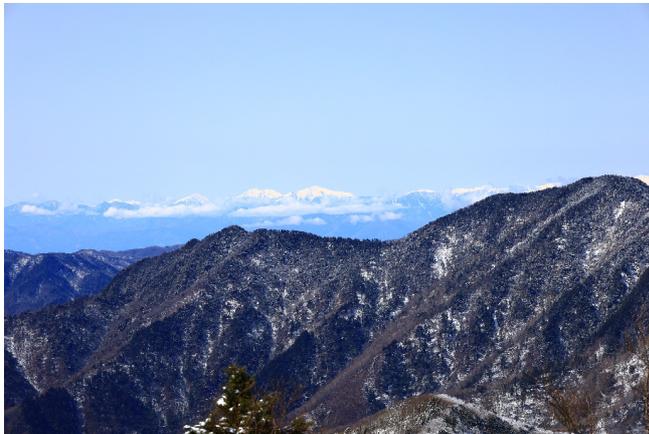
東京都の山頂標

この山頂で感じたことは、深田久弥氏の日本百名山に書かれていたように、大都会東京にこんな深山があるのかという事でした。

山頂からは、南アルプスの山々や奥秩父山塊の美しい景色を見ることができ、しばしの間、その美しさに目を奪われてしまいました。

日本アルプスのアルペン的な雰囲気も良いですが、奥秩父山塊のように樹木の生い茂る「The日本の山」という感じの山も好きです。

山頂では、行動食のチョコレートクッキーとゼリー飲料で小腹を満たし、下山を開始しました。



南アルプスの山々には雲が掛かってきました



山頂を後にします



下山も楽しい



登山口の看板、良く見ると埼玉県と書いてある

時間的にも体力的にも余裕があったので、気分良く下山を楽しみます。

但し、この頃になると登山道の雪は溶けつつあり、靴とゲイターは泥まみれ。

ちょっとテンションが下がりながらも、12時37分、無事に登山口の駐車場まで戻ってきました。

駐車場では、汗をかいた体を拭き、服を着替え、昼ごはん用に準備していたパンを食べながら帰路につきました。

帰りのルートは、今後の遠征のルートの下見も兼ねて大菩薩嶺ラインから甲州市に入り、勝沼ICから中央道へ。双葉JCTから中部横断自動車道を南下、新名新を通過中にこの先の京都、大阪が渋滞していたので、滋賀県の甲南PAで早めに車中泊、朝3時過ぎに出発し午前10時に無事帰宅しました。

冒頭に記したように、雲取山への登山は距離はややあるものの、登山道は非常に整備され危険な箇所が少ないことから、2,000m級の山へとステップアップするには丁度良いと思います。

但し、そうは言っても滑落などの事故も起きているようですし、今回のように雪があるとその危険度は上がってしまいます。

特に転倒・滑落は、登山の後半、足に疲労が溜まった下り坂で多く発生していると思います。

登山をされない方は、上りがきつく、下りが楽だと思いがちですが、上りは心肺が苦しいだけで、下りの方が足に大きな負担がかかり辛いです。

まあ、これは歩行技術と体力（足の筋力や体幹の強さ）によるところが大きいと思います。

山を決して舐めない、自分の体力と経験を十分に考慮した上で常に安全第一を意識し、今後も登山を続けていきたいと思っています。